

第八節 養生所の診療と臨床講義

養生所の開院後、多数の患者が診療を受けに来て、二・三週後には七十人にも上った。養生所規則に基いて診療事務を行っていた幕府は極貧のものからは乙名、散使の連署のもとに無料診療を行ない、ヨーロッパ人には特別室を設け、一日、二メキシコドルを徴収した。これは多年の希望で特別室が附置されたのである。即ち、外国船入港に際し、一般患者のみならず、天然痘、チフス、コレラ、骨折患者、或いは死者がその船客、水夫中にいて、停船中の甲板上でその処置をしなければならない不便さと時間潰しに悩まされていたボンペにとっても、諸国の商船や艦船にとっても便宜であった。然しその報酬は長崎会所の臨時収入で、ボンペはその特別手当を受けなかった。

開院二・三日後、診療に来る男女が殆んど裕福な役人階層で、貧民階層の市民たちは病院を訪れることを憚る

風があった。又、入院に際しても、役人などは一般市民と一室に収容されることを好まず、市民も身分が違うため、同室を憚ったのである。そこでボンペは入院する役人又は妻子を特別室に収容し、貧困な人々を救う目的でもあった養生所規則を有効ならしめるよう努めた。身分の高い婦人が美しく着飾り、五・六人の侍女と共に来院することは珍しくなかったが、その処置も公平に取扱い、患者一人を入れたが、兎角役人との抗争に悩んだボンペはできるだけ譲歩しながら厳格な態度をとった。

長崎の市民にとって、規則正しい食事をとることは非常に困難で、その習慣であった随時の採食も漸次改められ、二・三週後にはボンペの指示に従うようになった。殆ど毎日米食をするのは洋食の高価なためと思われるが、それよりもむしろ慣習によるものと推定される。然し何故洋食を用うべきかという理由を知って後は、却って洋

第八節 養生所の診療と臨床講義

食を好むようになった。当初、ベットに臥すことにも馴れず、迷惑したようであるが、後ではすっかり馴れた。

ポンペは養生所に移ってから朝八時に出勤して廻診をなし、生徒はポンペに従って来て指導を受けた。全くヨーロッパ式の教育方法が実施できるようになったのである。生徒等は三ヶ月交代でこのポリクリニックを分担したが、教科課程は繙帯学、処方箋記載、調剤室における調剤、食事と入浴の監督、牛痘種痘の記載、病歴簿や日記の保存等であった。

薬局においては調剤の実習をなした。そして廻診後、外来患者の診察を行ない、ベットの側で臨床講義を二時間ほど与えた。その後午後三時まで休憩し、五時まで講義を続けた。又、午後の院内廻診後は自由であった。この課業時間は余りに多きに過ぎると申出る生徒も出たが、ポンペは苦情を許さなかった。松本良順はよく指導を手伝った。生徒も後で規律をよく守るようになったが、医学生は一度この職業を決定した以上は、それに全力を尽すべきであり、自分に患者が寄託されていることを自覚

してその病人に尽すべきで、自分の身体を思うべきではないとポンペは諭している。

養生所にはベットは最初百二十備えてあったが、後に特別用のベットが増加し、百二十四となった。そのうち、常に平均七十から八十のベットが用いられた。ポンペは一年間に九百三十人を取扱い、七百四十人が全治した。九十四人は長期治療により退院し、九十四人は未治療のまま退院した。死亡者は十三人で、そのうち七人はコレラ患者であった。そして二つの屍体が無親族であったため、解剖実習に用いた。そして三十七人が不治であった。開院一年後の文久二年八月二十八日、(一八六二年九月二十一日)には四十六人が入院加療中であった。

ポンペの給与は最初オランダ政府から年俸七百グルデンを支給されていたが、一八五八年四月十六日(安政五年三月三日)付で、四月以後は年俸七百五十グルデンに昇給した。わが国からは一ヶ月の俸給一貫四百六匁二分五厘の割合で支給された。

さて、ポンペが日本在留五ヶ年間に診療した日本人患

者数は、一万四千五百三十人で、養生所で診療した患者を除けば、男は五千六百人、女は五千七百人、小児は二千三百人であった。

ポンペは医学所において特殊疾患やその治療に関する講義と内科学各論の講義をし、更に、外科手術学及び眼科学等を講義した。学生には動物を実験せしめ、血管結紮などの手技を習得せしめ、外科手術手技を上達せしめたが、特に佐倉藩医佐藤尚中は太村町の伝習所時代同様、講義の分担を受持つて、ポンペの最も尊重した外科医であった。佐藤尚中は幾度も人知れず屍体を使用して手術を試み、外科手術は誠に上達して、正確で迅速で、冷静であった。然しこの佐藤尚中の場合は特別の例外で、わが国の外科医の誰もが尚中と同程度ではなかった。そこでポンペはフランスのベルナルの外科書を採用して外科手術の要約を著わし、生徒に役立たせようとした。

眼科学は学説も手術手技も教え、多数の手術を行った。ポンペの統計では長崎市民の八パーセントが眼疾患にかつてゐる。眼科学を特別に研究したい人は日本に渡れ

ばよいとさえポンペは述べ、稀病眼球癌にも一・二例接した。ポンペが講義の参考とした眼科書として、松本良順に贈った『眼科図譜』*Iconographie Ophthalmologique ou Description, avec Figures Colorées, des Maladies de l'Organe de la Vue, comprenant l'Anatomie Pathologique, la Pathologie et la Therapeutique Médico-Chirurgicales, par J. Sichel, Paris, 1856* はポンペの渡来直前に発行されたもので、当時としては最も新しい眼科書であった。著者ジールJulius Sichel は一八〇二年にフランクフルトに生れ、テュービンゲンとベルリンの医学校を卒業し、オーストリアのウィーンにおいてエーゲル Jäger の助手として四年間を送り、ウエルツブルグのシェーニンライン Schönlain のもとに一年半研究し、一八二九年、フランスのパリに移住して開業した人である。(Alfred Graefe u. Saemisch: *Handbuch der gesamten Augenheilkunde*, 1877. Leipzig) なお、本書は佐藤恒三博士、伊東弥恵治博士を経て、千葉大学医学部に伝えられている。

第八節 養生所の診療と臨床講義

文久二年七月（一八六二年八月）、眼科学講義を終り、社会医学のうちまだ講義をしていなかった法医学と医事法制を補講した。又、産科学の特殊講義も行った。そしてその講義も終り、閏八月二十二日（陽曆十月十五日）にポンペは六十一名の学生に別れを告げた。そして学生の希望により授講したすべての人に修業証書を授与した。それは第一級証書（學術・実地ともに成績優で、二十二人が授与された。）、第二級証書（成績良で、よく協力した者で、十六人が授与された。）及び第三級証書（可、自力では患者診療の不充分なもので、二十三人が授与された。）の三種であった。

さて、ポンペの講義中、最も強い影響を与えていた当時の医学者としてはフーフェランド、ヴンデルリッヒ、ロキタンスキ、ジーヘル、ウエーベル、ベルナール等があり、その他、コロデオ、フェールレの説も引かれていて、ドイツ、オーストリア、フランス、オランダ、イギリス各国の医学の最新学説を可能な範囲で、収めようと努力していたものである。